

武德大成記

廿五

内閣文庫	
番號	和 33099
冊數	31 (26)
函號	150

内閣文庫			
五	三	三	和
函	三	三	書
架	冊	號	類

三三九

共計一



武德大成記卷二十五

諸大名駿府ニ勤仕事

慶長十八年癸丑春正月朔駿府ノ

城年始ノ賀儀例ノ如シ中國四國

西國ノ諸大名例年ノ如ク去年ヨ

リ駿府ニ凡ソ天谷拜禮ス江府年

始ノ儀例ノ如シ二日江府御謠初

例ノ如シ著座ノ衆ハ越後少將忠

卷二十五

輝松平安房守

後二伊豆  
守ト云

西郷出羽

守松平丹波守左座夕リ最上駿河

守小笠原兵部大輔松平外記牧野

駿河守右座夕リ三日諸大名駿府

ヨリ江府三来リ拜禮ス二十五日

参議松平輝政

池田三左衛門  
門十リ

左衛門姫路人

城ニテ中風ヲ患テ兩日ニテ逝

去久大太略卷二十止

神君聞召御悲嘆アリ是月逝

台徳院殿命アリテ山口但馬守重

政ヲ放逐セラル是ヨリサキ大久

保相模守忠隣石川長門守康通力

女ヲ養テ重政力嫡子伊豆守ニ嫁

セシム康通卒シテ其子不才ニシ

テ暴行多クハニ禁錮セラル重政

七縁者ナル故ニ連坐セラル重政

入間ノ郡ニ蟄居シテ陳狀ヲ奉リ  
忠隣カ請求タルニ依テ婚姻ヲ結  
フト申上ケルヲ忠隣聞テ深ク憤  
ル明与忠隣罪ニ遭二月安藤對馬  
守村越茂助命ヲ養リ播州姫路ノ  
城へ行テ治務ヲ監察ス夏四月忠  
輝駿府ニ請リ奉ル奥列ノ伊達政宗  
神君ニ謁シ奉ル伊達政宗

モ來ル忠輝ノ婦翁ナリ政宗ヲ數  
寄屋ニ召シ茶會ヲ賜フ日野唯心  
山名禪高伴食夕リ去年松平太隅  
守重勝命ニ  
依テ上總介忠輝ノ家老職トナリ  
越後三条ノ城主ニ仰付ラル  
五月五日照高院法親王道勝醍醐  
ノ三寶院法親王當山本山修驗道  
ノ相論ニ依テ駿府ニ來リ訖ヘテ

ル  
三

神君訟ヲ聞給ヒ決斷アリテ武列  
ノ不動院ヲ放逐セラルレ當山本山  
兩方ヘ條令ヲ下シ賜リ法制ヲ定  
ラル泉塚ノ奉行米津清右衛門下  
吏賂ヲ貪ルノ罪ニ依テ阿波國ヘ  
流サル十九日越前家臣本多伊豆  
守富正御朱印ヲ賜リ國中ノ政  
務ヲ執行ハシム去年今村清水訴

フルニヨリテ罪セラル猶爭論ヤ  
マス中川出雲守廣澤兵庫助又富  
正カ事ヲ訴フ非道ナルニ依テ二  
人放流セラル竹嶋周防罪十キニ  
誣テ訴ヘラルニヨリ籠輿ニテ  
駿府ニ來ル罪十キニ依テ免サル  
周防誣ラレタルヲ耻テ自殺ス  
神君特ニ命アリテ本多丹下ヲ越

前ノ臣トシ丸岡ノ城邑四萬石

賜リ國務ヲ預リ聞シム丹下ハ作

子ナリ大閣ノ時秀康ニ從テ大坂

ニアリ後作丸衛門ハ大閣ノ怒

依テ下總國ニ蟄居ス卒シ二十日

テ後丹下駿府ニ勤仕ス

松平筑前守光常加賀國ヨリ來テ

神君ニ謁シ奉リ白銀五百枚綿五

百純紅絹縑各百匹ヲ獻ス其家

臣横山山城守奥村河内守奥村攝

津守各拜謁ス是ヨリ利光江府ニ

到リ津守各拜謁ス是ヨリ利光江府ニ

台徳院殿ニ謁シ奉ル獻物アリ六

月四日吉田ノ神龍院梵舜神道傳

授ノ事ニ依テ召サレケレハ京師

ヨリ來リ六日ヲ期トシケルニ

神君イカバ思召ケルニヤ命アリ

ケルハ神道傳授ハ古ヨリ秘奥十

レバ 叨<sub>ニ</sub> 受<sub>ラ</sub>ルベキ事ニアラス  
 卜 仰<sub>ラ</sub>レ 遂<sub>ニ</sub> 御傳授ナシ 十六日  
 公家法制五條ヲ定給<sub>ヒ</sub> 板倉伊賀  
 守勝重カ許<sub>ヘ</sub> 仰付<sub>ラ</sub>レ 奏問セ<sub>レ</sub>  
 公家衆家ノ學問晝夜無油断  
 様ニ可被仰付事

一 老若<sub>ニ</sub> 寄<sub>ラ</sub>ズ 背行儀法度輩者  
 急度可處流罪但依罪輕重可定  
 君年序事  
 一 晝夜ノ御番老若共<sub>ニ</sub> 無懈怠相  
 勤其外威儀正シ<sub>シ</sub> 夕相調<sub>ハ</sub> 伺候  
 ノ時刻式目ノ如<sub>ク</sub> 參勤仕様<sub>ニ</sub>  
 可被仰付事  
 一夜晝共<sub>ニ</sub> 無指用所町小路徘徊

堅停止事

一公宴ノ外私ニ不似合勝負并ニ

於不行儀之青侍狗置輩者流罪

同先條事

右條ノ相定所也從五攝家并ニ

傳奏其届有之時可行武家沙汰

者也

慶長十八年六月十六日

二十一日播州姫路ノ姫君國ニ歸

ル是ヨリサキ輝政逝去ノ後姫

君悲深カルベシト思召テ駿府へ

召寄セ給ヒ數日留滯慰メ給フ

神君命アリテ武藏守利隆ニ播摩

國ヲ賜フ左衛門督忠繼ニ姫君ノ御腹

備前國并ニ播州完栗佐用赤穂三

郡ヲ賜フ宮内大輔忠雄ニ忠繼ト

淡路國ヲ賜フ二十六日義作國主  
森右近忠政召アリテ駿府ニ來ル  
神君懇ナル仰アリテ松平忠繼年  
少シ意見セラルベシトテ名物ノ  
茶入ヲ賜ヒ饗セラル忠政ハ忠繼  
カ舅ナリ八月二十二日松平武藏  
守利隆左衛門督忠繼駿府ニ來リ  
家ヲ嗣デ各封國ヲ賜ル事ヲ謝シ

奉ル利隆ハ守家ノ太刀白銀三百  
枚ヲ獻ズ忠繼ハ長光ノ太刀白銀  
貳百枚ヲ獻ス兄弟トモニ江府ニ  
到リ  
台徳院殿ニ謁シ奉リ獻物アリニ  
十四日記伊國主淺野幸長卒ス嗣  
子ナキニヨリテ命アリテ幸長カ  
弟但馬守長晟ニ封國ヲ嗣シム

富田坂崎訟ノ事

秋九月

神君江府ニ赴セ給フ冬十月八日

富田信濃守罪ニ依テ奥州岩城ニ

鳥井左京亮所領竄セテ豫國ノ封邑

十一萬石ヲ沒收セラルル高橋右近

連坐ニ依テ筑後柳川ニ立所領

竄セテレソノ領邑七萬石ヲ沒收

セラルル初メ富田妻ノ兄坂崎對馬

守初ハ浮田左京ト云後家臣坂崎

左門罪アリ對馬守誅セシトシケ

ルシ左門出奔シ富田力家ニ隱レ

居ケル左門ハ對馬守ト富其時ハ

富田勢州津ノ城ヲ領シケルカ伏

見ニ居タル時ナルニ對馬守大ニ

怒リ津ノ城ハ馳行テ左門ヲ搜索

レトモ獲サリケレハ伏見ニ歸リ  
富田カ家臣一人ヲ人質ニ捕ヘ置  
テ富田カ法ニ背ク事ヲ  
神君ヘ訴ヘケレバ命ニ曰ク天下  
ノ事コトトシク  
將軍家ヘ讓附ス江府ニ往テ訴フ  
ヘシト仰ラレケレハ對馬守シバ  
ラク憤ラコラヘ歳ヲ超ケリ左門

ハヒソカニ高橋右近カ家ニ移リ  
居ケルニ富田カ妻アハレニテ密  
ニ米三百石ヲ左門ニ授ク左門ト  
モトヨリ黨ヲナシケル者富田カ  
妻ノ状ヲ密ニ盗ニ出シテ對馬守  
カ許ヘ行テソノ状ヲ對馬守ニ授  
ケ赦免ヲ乞ケレハ對馬守大ニ悦  
ヒソノ罪ヲ赦ス是年對馬守江府

ニ到リ訶フ  
台徳院殿江府へ富田ヲ召下シ是  
日本丸ノ大廣間へ  
神君モ御著座アリテ富田坂崎ヲ  
召シ出サレ訟ヲ聞セ給フ執政ノ  
諸臣悉ク列坐ス富田不法ノ亡人  
ヲ匿置<sup>カクシ</sup>サル由強テ陳ジケルニ争  
論ヤマザリケレハ坂崎懐中ヨリ

富田カ妻ノ状ヲ出シテ獻シケレ  
バ富田ハコレヲ知ラザル事ナレ  
トモ妻ノ所為ナレバ陳スル事ナ  
リガタクシテ罪ニ伏ス高山右近  
モ左門ヲ隠シ置タル罪ニ伏ス其  
後左門捕ヘラレ禁獄セントテ米  
津勘兵衛土屋権右衛門兩人左門  
カ左右ノ大指ヲ縛リ土井大炊頭

利勝安藤對馬守重信カ家士ヲ以  
テ警固シ遣シケルニ左門籠輿ノ  
内ニテ縛ヲ解テ輿ヲ出ル時ニ躍  
出テ大炊頭カ歩卒ノ刀ヲ奪ヒ警  
固ノ者ヲ害セントシケルヲ大炊  
頭カ家士藤左衛門ト云者ス十八  
千馳寄り捕ヘテ獄ヘ入レケル此  
事上聞ニ達シ藤左衛門ニ褒賞ヲ

賜フ二十日  
神君戸田ノ邑ニ遊獵シ給フ晦日  
神君河越ニ御座ケルガ藤堂和泉  
守高虎ヲ召シテ畠田カ伊豫ノ舊  
領ヘ高虎カ家士ヲ遣シ警固シ民  
百姓安堵スル様ニ治ムベシト仰  
付ウル十一月  
神君岩付鴻巣越谷葛西等ノ處

ニ遊獵シ給ヒ十二月三日駿府ニ  
歸ラントテ中原ニ放鷹シ給フ十  
四日江戸へ歸ラセ給ヒ越年留滞  
シ給フ是秋大久保石見守長安カ  
子七人亡父ノ罪思ニヨリテ謫居  
ノ處ニニクイテ自殺セシム是ヨ  
リサキ長安多年ノ罪アラハレケ  
ルニ病死シケレハ下吏ニ十按問

セラレ大罪多カリケレバ家財領  
邑ヲ没收セウレケレドモ猶モ贖  
ヒ難クシテ子共三十罪セウル此  
長安ハ甲州ノ者ニテ本ハ猿樂大  
藏大夫カ子ナリ邪オアル者ニテ  
登庸ラレ大久保相模守カ氏ヲ授  
ケテ諸國金山銀山ノ事ヲ仰付ラ  
レ石見佐渡并ニ諸國ノ貢稅ヲ收

ケル石見佐渡ヲバ我カ封國ト思  
ヒテ奢ヲ窮メ民ヲソコトヒ財寶  
ヲ貪リソノ惡事トモ數多ナレド  
モ便佞ナル者ナリケレバ外ハ廉  
直ナル様ニモテナシ存生ノ内ハ  
刑ニ遭サリケリ石川玄蕃頭并ニ  
鶴殿兵庫弓削多源七郎久貝忠三  
郎等ノ數人三十長安カ連坐ニ依

テ流竄セラル總檢校高山誕一ト  
云者琵琶法師ノ上手ニテ名高キ  
者ナリケルガコレモ連坐ニヨリ  
テ不座セラル其外ノ檢校六七人  
不座シケリ

禁中新殿成ル事

十二月十八日禁中新殿成ル

帝移ラセ給フ御即位ノ後

上皇ト不和ニテ給フヲ

帝ノ御母准后憤リ給ヒ人ヲ以テ

神君ヘ告給ヒケレハ

上皇コレヲ聞召テ悦タマハズ是

年小笠原兵部大輔秀政信州飯田

ノ城ヨリ所替仰付ラレ同國松本

ノ城ヲ賜フ松平伊豆守信吉植村

土佐守泰忠伏見ノ城ノ番衛ヲ勤

ム井伊掃部助直孝明年大坂ノ役

テ佐和山ノ渡邊大隅守大番頭ト

シテ伏見ノ番ヲ勤ム黒田甲斐守

長政從四位下ニ叙ス有馬中務大

輔忠卿豐氏力金森長門守重頼松

平志摩守重成各從五位下二叙入

安藤對馬守重信鹿嶋結城領邑二

萬五千石ヲ加へ賜り舊領ヲ合テ

三萬五千石ヲ領スハ

ハ

ハ

ハ

ハ

江戸西丸新城成ル事

慶長十九年甲寅春正月朔

神君江戸新城ニテ越年シ給フ歳

初ノ諸賀儀例ノコトシ去年駿府

へ歸ラセ給ハシトアリケレトモ

事故アリテ路次ヨリ江府へ歸ラ

セ給フ

台徳院殿本丸ヨリ早朝ニ来リ賀

シ給守家ノ御太力御馬代トシテ  
白銀百枚獻セラレ御座間ニテ拜  
禮シ給フ大澤少将基宿御奏者ヲ  
勤ム御盃ヲ賜フ松平右衛門大夫  
正久御酌ヲ取り水野金十郎御加  
ニ候ス金森左兵衛喜多見長五郎  
内藤掃部助陪膳ヲ勤ム御禮早テ  
諸大名諸士悉ク拜賀例ノ如シ元

日本丸拜賀ノ人ハ二日西丸ニテ  
拜賀ス二日本丸ニテ拜賀ノ人ハ  
三日西丸ニテ拜賀ス五日  
台徳院殿本丸へ  
神君ヲ迎へサセ給ヒ酒饌ヲ獻セ  
ラル

台徳院殿自陪膳ヲ御勤メ  
竹千代君十一歳ニ御給仕ニ候シ給

台徳院殿御馳走ノ夕メ自ラ猿樂

ヲ舞ハセ給フ次男國松八歳後二

言<sup>ト</sup>七猿樂セケル<sup>高砂</sup>界<sup>三</sup>苗<sup>百</sup>善<sup>十</sup>リ

三浦由武森女新價參延旭長五郎

三浦由武森女新價參延旭長五郎

三浦由武森女新價參延旭長五郎

三浦由武森女新價參延旭長五郎

大久保相模守忠隣竄セケル事

春正月二十日

神君ノ仰ニテ大久保相模守忠隣

ヲ佐和山ニ竄セケル是ハ去年十

二月三日馬場八左衛門ト云者忠

隣謀叛ノ企アリト讒言シ訶ケル

故十リ初メ馬場八左衛門ト云者

八甲州ノ士十リケルガ罪アリテ

八十餘ニシテ囚レ忠隣カ家ニ居ケルカ小ノ愈ニテ密ニ本多佐渡守正信カ宅ニ到リ詎リ言ケルハ忠隣謀叛ノ企アリト告来ル正信去ケルハ是ハ小事ニアラス汝ハ忠アル者ナリ厚ク恩賞アルベシトテ密ニ神君へ申上ルニ大ニ驚セ給フ正

信ハ忠隣ト同ク執政ノ職タリ俱ニ天下ノ事ヲ掌ル權柄威勢ヲ争フ心アリ是故ニ忠隣ヲ退ケシト思フ辛亥ノ秋忠隣カ嫡子加賀守忠常卒スル時忠隣悲ニ堪カ子諸事ヲ止テ引籠リ居タリソノ時正信モ女子ヲ失ヒ憂ノ中ナリケレトモ憂トセズシテ政務ヲ聞ケル

事常ノ如シ或人正信ニ言ケルハ  
初ハ深ク哀ニ給ヘドモ今ハ憂給  
ハサレハ如何ニヤト問ケレバ正  
信云ケルハ子ノ死テ哀ハ私事十  
少私ノ事ニテ官事ヲ勤ザルヲ忠  
臣ト云ヘシヤトアリケレハ座中  
ノ人皆尤ナル言ナリト感シケル  
正信モトヨリ忠隣カ所為ヲ刺シ

ト思テ加様ニ言ケルト心アル者  
ハ思ヒケリ馬場カ讒言ヲ申上テ  
ヨリ計入ト云ケル事申上  
ニ  
神君モ疑ヒ思召レ正信ヲ以テ密  
ニ  
台徳院殿へ仰遣サル  
台徳院殿正信ニ問ハセ給ケルハ  
大御所ニハ何トカ思召レケルヤ

トアリケレハ正信申上ケルハ御  
憤甚シクマシマスト申上ル  
台徳院殿御返答アリケルハ忠隣  
ヲ罪セラル、事如何様ニモ  
神君ノ命ニ随ヒ奉ラシト仰上ラ  
ル正信スナハ千御返答ヲ申上ル  
神君仰ラレケルハ忠隣カ平生  
幕下ヘ奉公ノ勤如何様ナルト問

ハセ給ケレバ正信申上ケルハ忠  
隣近年ハ諸事上ヘ怨アル様ニ見  
ヘ候ニヨリ政務ノ御相談モ希ニ  
ナリタリソノ上  
幕下ヘ奉公勤候者ハ皆忠隣カ親  
類ト懇ニ恩顧アル者ニテ候只今  
大御所様御在世ノ間ハタトヒ異  
心アリトモ事ヲ起シ申事ハ有ベ

カラス後ニ  
幕下ノ御世ニナラセ給ハシ恣ニ  
狂逆ヲナスベシ天下ノ御憂ニテ  
候昔モ高師直カ君ニ叛キケル時  
ニ諸士尊氏ニハ從ハズ皆師直ニ  
ツキ從ヒテ直義ホドノ親キ弟ニ  
テモ敵對ナリガタクシテ官方へ  
降参シタルト兼リ候加様ノ古事

ヲ思召合セ給ヒ忠隣ヲバ暫ク押  
籠置セ給ヒ然ルベク候ト申ケレ  
ハ  
神君イヨリ御疑アレドモ邊ニハ  
仰出サレズ去年冬忠隣ヲ召シテ  
命ゼラレケルハ近年京師伴天連  
ノ輩邪法ヲ勸テ年ヲ遂テ羣ヲ十  
シ人ヲタブラカシ害アルベシ汝

京都へ行テ委細ニ按問スベシ若  
其事明ニ察シ難クハ汝ヲ長崎ニ  
行シメテ九州ヲ搜シ問ハシムベ  
シト仰付ラレケレバ忠隣命ヲ美  
リ正月五日江府ヲ發シ十七日京  
師ニ入テ藤堂和泉守カ宅ヲ宿館  
トシ伴天連宗ヲ按檢ス其師ト十  
ル者トモ西京四條ノ二寺ニアリ

急ニ監吏ヲ遣シ二寺ヲ焼滅シテ  
邪從ヲ皆捕ヘシム師タル者二人  
ハ逃出テ西國へ行キ隠レケル十  
九日  
神君本多正信ヲ召シ命アリケル  
ハ忠隣



幕下へ告ズシテ山口但馬守ト私  
ニ婚姻ヲ結フ此罪ニヨリテ領邑

ノ没收スベシト仰付ウル使テ發  
シ執政ヨリ状ヲ以テ板倉伊賀守  
勝重カ許ヘ忠隣カ罪状ヲ申遣ス  
勝重ス十八千忠隣カ宿館ヘ行向  
ヒ仰ノ肯ヲ述ブ忠隣驚カズ京都  
ノ人皆コレヲ聞傳ヘ大ニ躁ケレ  
バ忠隣此由ヲ聞テス十八千家士  
ニ命シテ鐵炮其外武具ヲ悉ク包

三カヲケテ勝重カ官舎ヘ持セ遣  
ケレハ京師ノ騷動モ止ケリ人皆  
忠隣カ忠心ヲ感シケル仰ノ肯ニ  
依テ忠隣ハ江州佐和山ニ蟄居ス  
井伊右近大夫直俊カ所領ナリ  
神君ス十八千安藤對馬守重信本  
多出雲守忠朝淺野采女正長重松  
平越中守定綱高力左近大夫忠房

等ニ仰付ラレ忠隣カ小田原ノ城  
邑ヲ没收ス二十一日  
神君江府ヲ發駕シ給ヒ行路放鷹  
シ給テ二十四日小田原ニ入セラ  
ル  
台徳院殿モ從ヒ給ヒ二十五日小  
田原へ着セラレ其夜相議セラル  
本多佐渡守正信藤堂和泉守高虎

卷十五

十四

モ御前ニ侍ル  
神君ス十八千江戸駿河ノ卒徒ニ  
命セラル小田原ノ城郭ヲ悉ク毀  
テ本丸計ヲ殘シ置ル二十七日  
神君駿河へ歸ラセ給フ諸士ニ仰  
付ラレ弓鐵炮ヲ列子テ箱根山ノ  
路ヲ警衛セシメ三島ヨリ大磯マ  
テ行人ヲ禁シ止ム

卷十五

十五

台徳院殿モ江府へ歸ラセ給フ二  
 月二日忠隣力庶子二人右京亮教  
 隆生膳正幸信武州河越ニ配セラ  
 ル嫡孫仙丸後加賀守忠常力子十リ  
 ス父忠常力領邑ヲ嗣ケル力幼少  
 十レバ罪ヲ加ヘ給ハス初ノ如ク  
 二萬石ヲ賜フ忠隣力次男石川主  
 殿頭忠總ハ他家ノ養嗣タルニ依

テ罪セラレス仙丸忠總二人ハ蠶  
 居ス後寛永二年忠任免サル元和  
信ハ南部ニ遷サル寛永五年忠  
隣力叔父大久保次右衛門病テ卒  
 ス其子モツバイテ卒シケレバ家  
 ノ嗣絶タリ其所領ハ沼津ノ城十  
 リケルガ命アリテ此城モ毀レム

五日

台徳院殿命アリテ近侍ノ臣青山  
大藏大輔森川内膳正日下部河内  
守大久保與十郎大久保半助等數  
人ヲ黜ラル先年大久保忠常小田  
原ニテ病ケル時ニ命十クシテ行  
テ問ケル事ヲ答メ給フユヘナリ  
忠隣佐和山ニアリケルヲ南光坊  
憐ニ忠隣力罪十キ事駿府へ誅へ

卷三十五

三十五

ケレドモ  
神君遂ニ問ハセ給ハズ  
一説ニ後  
佐和山ノ城ヲ領シケル時忠隣力  
舊切多ク重キ臣十クラキ由テ承  
ニ對面シテ實ヲ以テ罪十キ由テ承  
ル何トシテ實ヲ以テ罪十キ由テ承  
ヤト申ケレバ忠隣答ケルハ我罪  
十キ事ヲ許ヘバ君上ノケルハ我罪  
召事ヲ顯ルスナリ言ハキ事ニ  
不ト申ケルヲ直ク感シケル  
是月松平和泉守家乗卒ス年四十  
嫡子源次郎乘壽後和泉命ヲ奉リ

卷三十五

三十五

家ノ嗣ノ三月松平丹波守康長命

ノ承リ小田原ノ城ノ番衛入五月江府

ニ 歸

台徳院殿執政并ニ天下ノ諸務ニ

預ル諸臣ニ命セラル誓詞ヲ獻セ

シム九箇條酒井雅樂頭忠世土井

大炊頭利勝酒井備後守忠俊安藤

對馬守重信水野監物井上主計頭

米津勘兵衛島田兵四郎八人連判

ス此比米津清右衛門去年ノ罪ノ

重キ故ニ阿波國ノ配所ニ與テ

誅セラル

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

耶穌宗ノ法禁止ノ事

慶長十九年春正月松平筑前守利  
常加賀國ヨリ使者ヲ以テ申上ケ  
ルハ高山右近南坊ト號シテ耶穌  
宗ヲ勸ム内藤飛驒守如安モリノ  
徒十ルエヘニ二人ヲ捕ヘ籠輿ヲ  
以テ京都ヘ送り遣スノ旨注進ス  
所司代板倉勝重モ多クソノ黨類

ヲ捕悉ク名ヲ注シテ獻ズ

神君ス十八本多佐渡守正信同  
上野今正純ヲ召シ命セラレケル  
ハ日本國中耶穌宗ヲ唱ル者ゾノ  
法ヲ變ジテ改ル者ハ赦スベシ改  
ザル者ハ速ニ津輕ヘ流スベシト  
アリケレハ正信正純仰テ承リ諸  
國へ觸遣ス此宗ノ日本へ來ルコ

トハ近比ノ事ナリ大友宗麟豊後  
國ヲ領シ西國ニテ勢ヲ振ヒ國モ  
富ケレハ南蠻船年々往來シテソ  
ノ國民ト賣買シケルニ耶穌ノ法  
ス、メ教ケレバ高買ノ利多ク悦  
ヒ人々三十ソノ法ニ歸ス宗麟モ  
コノ法ヲ悦ビケルソレヨリ京都  
ヘモヒロマリ織由信長ノ時高山

卷三十五

三十九

右近深ク此法ヲ信ジ伴天連ナリ  
ケルカ荒木攝津守々信長ニ頃ハ  
サリケレバ信長ヨリ伴天連ヲ一  
人遣サレ高山ニ言合メケレバ高  
山ス十八千信長ニ歸服スルニヨ  
リ荒木モ逃去又信長此功ヲ賞シ  
伴天連ニ幾利支丹ノ法ヲ唱ル事  
ヲ許サル

中華ニモ此法ハ古ヨリ  
魚カリケルニ大明ノ隆

卷三十五

三十九

慶萬曆ノ此西秦ノ利瑪竇ト云南  
 蠻人大明ノハ渡リ浙江府ノ内ニ荒  
 地ノアリケルニ一宇ヲ作リ學問  
 シ番語ヲ漢字ニシテ天主實義  
 人十書友論十ト云書ヲ作リ人  
 ノ法ヲ信シケレハテ  
 聞テ麗地我ト云南蠻人ソリケル  
 數十人伴ヒ来リ云利瑪竇ニ從ヒ  
 民ニ金銀財寶ヲ授テ詐ケル愚  
 イヨリ國ヲ奪ハシメテ  
 ハテヨリト云ハシメテ  
 謀ナリト云ハシメテ  
 人ノ歳ヨリ

神君コノ法ヲ按檢シ給ヒ邪法十  
 レバ固ク禁ジ止メテ命アリ  
 ケルハ西洋國ヨリ来ル者ハコト  
 くク本國へ還シ遣スベシ日本人  
 民彼邪法ニ入ル者ハコトぐク改  
 メ古ヨリ有来ル宗旨ニ歸スベシ  
 ト仰付ブレ南禪寺ノ以心長老ニ  
 佛法ト邪法トノ事ヲ文ニ書セウ

レ天下ノ民ヲ喻シメ給フ是年ニ  
及テ大久保忠隣ニ命アリテ邪法  
ヲ按檢ス忠隣竄セウレテ後此比  
仰ニテ高山右近内藤飛騨守并ニ  
伴天連ノ徒黨百餘人ヲ籠輿ニテ  
長崎へ送り遣シ奉行長谷川左兵  
衛藤廣命ヲ奉テ九州ノ邪徒ヲ按  
檢シ右近飛騨守以下ヲ初トシテ

コトクク舩ニ乗也阿媽港へ逐ヒ  
放タル原主水ト云邪徒関東ニ隱  
レ居ケルヲ秋九月搜シ出シテ十  
ノ指ヲ切り額ニ焼印シテ逐ヒ放  
タルカクノ如キ者多シ是ヨリ邪  
法大半ハ止又猶逃潜レ居ケル者  
共八年ノニ罪セラル

諸宗僧諸技藝ヲ試ニ給フ事

神君天下ヲ治メ給ヒ朝廷ノ儀式

ヲ正ス

天子ヲ崇メ尊ヒ公卿ノ家業ヲ勸

メ勵シ文武兼備リ禮樂ヲ能明ニ

シテ四書六經ノ義ニ通スル者其

道ヲ聞給ヒ弓馬兵術ニ妙ナル者

ハ其藝ヲ試雜藝小技マデソノ品

一ニ從ヒ委ク試ニ給ハヌハ十シ

一向門徒ノ家臣下間少進法印ト

云者猿樂ノ藝ニ妙ナリ其外猿樂

ノ大夫觀世今春保生金剛ト云

名高キ上手ドモ并ニ笛鼓狂言其

藝ノ上手ニテ名アル者トモマデ

悉ク召テ屢猿樂ヲ御覽アリ越前

ノ幸若大夫トテ舞ノ上手盲人ノ

琵琶法師平家夕唱ル檢校トモ本  
因坊等砂并ニ宗柱ト云基象基  
ノ上手トモ皆駿府ニ召レテ時  
クニ夕ノ藝夕御覽也ラル一藝一  
能カル者皆カクノ如ク召集メ試  
ニ給フ故ニ諸藝能ノ家皆勤テ怠  
ル事ナク精妙ヲ得ル者多シ且又  
諸宗ノ佛法夕モ悉ク聞也給フ初

神君増上寺僧源譽夕信セラレ國  
師ト成シ浄土宗ノ法問夕屢聞給  
フ其後仙波ノ僧正南光坊天海夕  
召シ天台宗ノ論議夕聞召ス又曹  
洞宗ノ僧徒夕召シ法問アリ慶長  
十九年南光坊ニ命也ラレ叡山ノ  
老僧正覺院僧正等ノ数人夕選テ  
駿府ヘ召シ屢論議夕聞給フソノ

春二月高野ノ學侶大樂院多聞院  
菴室院等ノ老僧ドモ夕召シ真言  
ノ論議ヲ屢聞召ス三月僧録司金  
地院崇傳長老ニ命也夕レ五山ノ  
長老宿學ノ徒ヲ選テ十數人召レ  
為政以德ト云題ニテ文ヲ作リ寶  
樹多華菓ト云題ニテ頌ヲ作ラシ  
ム

卷三十五

三十五

台徳院殿モ江府へ召シ君子徳風  
也小人徳草也草尚之風必偃ト云  
題ニテ文ヲ作ラシ人法住法位世  
間相常住ト云題ニテ頌ヲ作ラシ  
人  
神君又興福寺ノ僧惣待院喜多院  
阿彌陀寺等ヲ召シ法相宗ノ論議  
夕シハ  
夕シハ

卷三十五

三十五

二觀識坊長存坊圓福寺等ヲ召シ  
真言新儀ノ論議ヲシバ聞給フ  
六月東大寺ノ清涼院大喜院惣持  
院等ヲ召シ華嚴宗ノ論議ヲ聞給  
諸宗ノ奥義ヲ聞召スト仰付ク  
シケレバ或秘スルモアリ或ハ少  
シ申上ルモアリ南光坊ハ台教ニ  
先テ黯智アリケレバ天下ノ主ハ

佛菩薩ナレハ秘密ヲモ隠スベキ  
事ナラズトテ天台ノ奥義ヲ殘ラ  
ズ顯シテ申上ルソノ故ニ  
神君密ニ其血脉ヲ受サセ給ヒ持  
ニ御信仰アリ諸宗ノ學術ヲ試ニ  
給ヒ宿學ノ者共ニ金銀衣服ヲ賜  
チコレヲ賞シ或ハ寺領ヲ賜リ賑  
給ケレハ諸宗ノ僧徒トモ有リ難

キ事ニ思ヒイヨシ各宗門ノ學ヲ

勤テ怠ル事ナカリキ

... 諸君... 宗門ノ學ヲ... 勤テ怠ル事ナカリキ... 諸君... 宗門ノ學ヲ... 勤テ怠ル事ナカリキ...



